

論文審査の結果の要旨

氏名：遠藤 琴 美

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

論文題名：ヤン・シュヴァンクマイエルの映像作品における「触覚」の分析的研究——《夢》《存在の境界》《言葉》を中心に——

審査委員：（主査） 教授 齋藤 安彦

（副査） 教授 中村 二郎

教授 眞邊 一近

名誉教授 林 成之

教授 丸田 利昌

教授 保坂 道雄

遠藤氏より提出された博士審査論文「ヤン・シュヴァンクマイエルの映像作品における「触覚」の分析的研究——《夢》《存在の境界》《言葉》を中心に——」はチェコの芸術家、映画監督、および映像作家であるヤン・シュヴァンクマイエルの学術的研究である。その最大の特徴は、学際的研究であり、従来の芸術・文学研究に加え、言語論・精神分析学理論あるいは比較文学的視点などから分析・考察している点である。国内外を問わず、これまでのシュヴァンクマイエル研究は学術的な研究が少ない。研究論文にしてもシュヴァンクマイエルの作品の独特な作風を評価する研究と作品に含まれる政治的隠喩を指摘する研究に二極化しているとも言われている。したがって、本博士審査論文はヤン・シュヴァンクマイエルを学際的視点から分析している点で、挑戦的な取り組みといえよう。論文の章構成は以下の通りである。

第1章 序論

第2章 ヤン・シュヴァンクマイエルと《触覚》——「肉片の恋」における言語論的連合作用と芸術的異化作用について——

第3章 ヤン・シュヴァンクマイエルと《夢》——『アリス』の《夢》と《現実》について——

第4章 ヤン・シュヴァンクマイエルと《存在の境界》——「アッシャー家の崩壊」と「幽霊宮」について——

第5章 ヤン・シュヴァンクマイエルと言葉——「対話の可能性」と「対話の不可能性」について——

第6章 終章

論文の中心をなす第2章から第5章の四つの章は学術雑誌にすでにそれぞれ単独で掲載された論文に加筆・修正がなされたものである。以下、各章の内容を要約する。

第2章「ヤン・シュヴァンクマイエルと《触覚》——「肉片の恋」における言語論的連合作用と芸術的異化作用について——」は短編映画「肉片の恋」（“Zami lované maso,” 1989）を具体例として、シュヴァンクマイエル作品における最大の特徴でもある触覚的な表現が、触覚のもつ原始性、原初性、そして性愛にもとづくものであることを指摘している。シュヴァンクマイエルは自身の作品において、見るものに触覚を想起させることおよび触覚の経験を与えることの重要性を強調している。一般的に言えば、映画や映像作品は見るものであり、聴くものである。すなわち視聴覚的作品であり、触覚的作品ではない。しかし、シュヴァンクマイエルは自身の映像作品において、視聴覚的手段を用いて、逆説的に触覚を表現しようとしていると論じている。また、彼の表現が、ロシア・フォルマリズムの概念である異化作用によるものであることを中心に、なぜ彼が触覚にこだわるのか、触覚とは何を意味するのかという問題を、言語論的側面から考察している。

第3章「ヤン・シュヴァンクマイエルと《夢》——『アリス』の《夢》と《現実》について——」はルイス・キャロル原作の「不思議の国のアリス」と、シュヴァンクマイエルの長編映画『アリス』（“Něco z Alenky,” 1987）との考察から、夢と現実のロジックや、言語あるいは幻想というフィルターを通してしか見ることができなくなった象徴界的現代への批判が、シュヴァンクマイエル作品に一貫する哲学であることを論じている。一般的、あるいは通常のアリス論においては、「不思議の国」＝「夢の世界」と認識

されているこの構図は、シュヴァンクマイエルが原作をもとに映像化したアリスの夢の世界とは異なっていることを指摘している。アリスが見た夢は、「不思議の国」というトポスにおけるもうひとつの現実であり、この現実こそが、まさに夢であるという認識によって、シュヴァンクマイエルは、アリスの夢の世界へわれわれを導いている。彼が映像化した現実、アリスが見た現実であり、通常の、日常的な現実すなわち、われわれが経験している物質的・質料的世界ではない。シュヴァンクマイエルはアリスの目を通して、原始的・原初的な現実を、夢のように見せようとしたと分析している。

第4章「ヤン・シュヴァンクマイエルと《存在の境界》——「アッシャー家の崩壊」と「幽霊宮」について——」はエドガー・アラン・ポーの原作をもとに映像化された、同タイトルの短編映画「アッシャー家の崩壊」(“Zánik domu Usherů,” 1989)と、その中で、テキストと映像双方において、作品の中心となっている「幽霊宮」という詩について、生物と無生物の境界の曖昧性の問題、ソシュールの言語学の問題、および言語と認識や存在の問題に言及し、そこから、シュヴァンクマイエルの創作の本質に、近代批判があることを示す。ここでは、ポーの小説の中心となる詩「幽霊宮」についての考察と、シュヴァンクマイエルの「アッシャー家の崩壊」における作品全体の構造を分析し、ポーのテキストが潜在的に所持している《日常→非日常→日常……》というスパイラル構造を、シュヴァンクマイエルが小説の本質を捉えて読み解き、自らの映像作品において、その構造を模倣していることを明らかにする。この日常から非日常へ、そして再び日常へ戻るという構造、または《意識→無意識→意識→無意識……》、あるいは《現実→夢→現実→夢……》といった円環構造は、平面的・二次元的なものではなく、スパイラルのような、立体的三次元構造をしている。つまり、見てしまった、知ってしまった後は、元の場所、すなわち日常に戻ることはできないことを指摘している。

第5章「ヤン・シュヴァンクマイエルと言葉——「対話の可能性」と「対話の不可能性」について——」はシュヴァンクマイエルの哲学を最もよく観察できる作品の一つとして挙げられる、1982年に発表された「対話の可能性」(“Možnosti dialogu,” 1982)をもとに、対話の可能性について詳しく分析している。シュヴァンクマイエルの多くの映像作品では、ナレーションやセリフといった言葉が使われていない。それは、シュヴァンクマイエルのなかに、言葉に対する懐疑、あるいはその性質上、本質的なものが表現されない、根本的なものを表現し得ない言葉に対するある種の恐れが存在しているからだとして分析している。このような言語に対する批判は、シュヴァンクマイエルの作品の特徴でもある触覚的な表現、あるいは近代批判へとつながっていく。作品には、「対話の可能性」という日本語タイトルが付けられているが、チェコ語原題は“Možnosti dialogu”、英訳すると“Dimensions of Dialogue”と表わされ、この作品は、対話というものを様々な側面から観察した寓話という性質を持ち合わせている。それはつまり、対話の可能性=可能性に限った話ではない。チェコ語原題からもわかるように、対話による impossibility = 不可能性がもう一つのテーマとなっており、シュヴァンクマイエルの的に解釈をするならば、これこそが対話の本質であると考察している。

終章においてシュヴァンクマイエルの芸術作品に共通するテーマである触覚・夢・存在の境界・言葉は現代において過小評価されており、大きな可能性を秘めたままとなっていると指摘している。したがって、シュヴァンクマイエルは芸術という人類共通の普遍的な手法を用いて、われわれ現代人に、その可能性を示そうとしているのではないかと考察している。

先行研究により、シュヴァンクマイエルの学術的研究が2極化していることや彼の本質と思想性についての分析・考察がこれまでの研究に欠如していることが指摘されている。これらの先行研究への批判を踏まえ、本論文は学際的なアプローチにより、シュヴァンクマイエルの本質と思想性を明らかにすることを試みている。非常に挑戦的な試みであり、評価される部分も多々見受けられる。特に、シュヴァンクマイエルが触覚にこだわる理由として、彼の見せかけではなく、より本質的なものに対する憧れと欲求を挙げている点は評価できよう。また、シュヴァンクマイエルの近代化した社会に対する反抗を含む創作活動が、これまでの聴覚イメージ(シニフィアン)に基づかない、触覚という新たな言語・ラング・意味・価値・文化体系に、人類の文化的普遍性を見出したからに他ならないと指摘している点や、原始的・原初的であるがゆえに多くの可能性を秘めた触覚という新たな言語体系によって、まだ開拓されていない、新しい、衝撃的な世界を、われわれ現代人に見せようとしたからではないかと分析している点も評価に値する。

しかしながら、学際的アプローチを試みていることから、各専門分野の審査委員からは博士審査論文に対していくつか批判的な意見があった。もっとも重要な批判は、論文において用いられている言葉の定義

についてである。論文の中核をなす、「触覚」についても、言語学・心理学・文学・脳科学といった分野においてどのような定義がなされているのか、また、論文においてどのような定義で使用しているのか、明確でないことが指摘された。また、「意識」、「無意識」および「深層意識」という用語も、精神分析学での定義と医学および言語学では意味することがやや違うことが指摘された。さらに、論文の書き方として、「はじめに」において言及された本論文の目的や貢献について、結論において明確に言及がなされていない点も指摘された。最後に、論文中において、論理の飛躍が見られ、説明の不十分な個所なくつつか見られたことが指摘された。

審査委員からの指摘をもとに、論文の修正がなされた。修正された論文を審査委員全員に再度、査読していただき審査委員全員がシュヴァンクマイエルの学術研究として十分な貢献が認められると判断した。よって本論文は、博士（学術）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 26 年 12 月 12 日